

林檎のなる土地の郊外／百年の棲家

平井太郎 〔社会学 弘前大学〕

岩木山という行儀のいい山が平野を越えて真っ白に見えて、反対の方には八甲田の山脈がもう冬だぞという風に連なっている。

——私が暮らしている「林檎のなる土地」は、こうして二つの山を眺める朝に始まる。冒頭の二節は今和次郎『日本の民家』からのもの。調査（1920年4月）、執筆（1922年5月）されてから百年練り返される営みが、ここにはある。今は、自著で「林檎のなる土地」と呼んだ津軽の城下町に生まれ、同書のスケッチ付きコラム群〔初版「絵と説明」、続版「採集」〕の冒頭をその地の小農の家で飾った。

小農の家が佇むのは街道筋。百年前の当時から農村ではなく、近世来の舟運の拠点の町外れであった。スケッチでは「雪囲い」が強調されている。多方面に業績を残す今の生涯で、雪とともにある住まいや暮らしをどうデザインするかは、おそらく唯一貫したテーマだった〔『*Notes*」第6号〕。

百年後の現在もそれは、この「林檎のなる土地」での「せつなさと面白さ」（藤森照信『岩波文庫版「日本の民家」解説』）として変わらない。今日も私は、3シーズンと持たない一揃え10万円前後する雪タイヤをあつらえ直すか、いつ履き替えさせるか思い悩んでいる。伴侶が急な病いに倒れ、この冬、1人で雪避けをどうしようか、漠然とした不安がよぎる。

だが、それもまた楽しみである。予想されるようなウィンターリゾートが……といった楽しみではない。タイヤのやり練りにはじまり、どう雪道をやり過ごすか、地吹雪を凌ぐかなど、クルマをめぐるせつない悩みは、この地に暮らす人びとの恰好の話題になる。そうして社交〔*social*〕が営まも休むことなく運んでいた。

たしかに現在、馬はトラクターとクルマに取って代わられた。だが消え去ったわけではない。かつての馬喰〔*バクウ*、津軽でいう「バクエロ」〕は農機具や自動車の修理工として生き延びた例が少なくない。その名残か、型落ちし屋根を剥がれて運搬車に改造された軽トラは、今も御馬喰〔*オバケウ*、津軽でいう「オバクエ」〕と呼ばれ慣わされている。

何より、漬された馬の肉を購うところから出発した肉店が実に多い。城下町を二重三重に取り囲むように点在する。戦後は豚や鶏を主に扱うようになったが、その店独特のタレに漬け込まれたモツは、今、「林檎のなる土地」で生まれ育った幅広い世代に共有されるソウルフードになっている。

盆の時期、屋下がりから宵の口まで、この土地の郊外では、あちこちで煙が上がる。盆の火でもあるがモツ焼きの火でもある。軒先や路上に人びとが円居し、いつ果てるともなく飲み食べ語り続ける。今年の盆はたしかに円居の輪が小さかった。だが人びとはやはり、かつてともに暮らしていた痕跡のある獣の臓物を食らいながら、死者はじめここにいない人びとも交歓していた。

これが「林檎のなる土地」の郊外の暮らしと住まいの現在である。今和次郎の百年前の書は初め、「日本の民家」とともに「田園生活者の住家」と題されて世に送り出された。つまりそれは、たしかに失われゆく民俗を集め「郷愁を沸かせる力」（藤森前掲文）をもつと同時に、人びとと環境が交渉を重ねる未だ来たらぬ住まいと暮らしを素描する試みでもあった。そこで素描された人びとと環境の交渉の「せつなさと面白さ」は、雪／米／漬物／馬／クルマ／臓物というように、少しずつずれながら折り重なって、百年

れうることも、紛れもなくモーターゼーションの洗礼を受けたクルマ社会（*car*）の暮らしの、これまで語られてこなかった面白さだ。

さらに、雪に鎖される住まいと暮らしは独特の豊かさをもたらす。今のスケッチを注意深く眺めると、ムシロの戸口を入れてすぐツケモノと記された四つの円環が目に入る。漬物樽である。雪とともにある暮らしは、こうして、決して広くない住まいのただなかに、保存食の居場所を育む。

私自身、この「林檎のなる土地」に暮らしてまず驚かされたのが、メシの漬物の存在だ。現在も酒（日本酒）の当てに欠かせない「スシコ」。近世から小農でも白米を常食にできた、内地唯一の土地（日本食生活全集第2巻）ならではの伝承食である。だがそれは、寒冷を無視し商品作物としてコメ単作を強いてきた、幕藩制、近代地主制、戦後農政と連綿とした権力作用の落とし子である。スシコを楽しむ裏側には、数年に一度の冷害で生まれる膨大な餓死者、失業者が横たわっている（太宰治『津軽』）。

だからこそ私は、「日本の民家」の「林檎のなる土地の家」を単純に貧困の象徴と読み解く理解（瀝青会『今和次郎「日本の民家再訪」』）には与し〔*よ*〕ない。そこには必ず、「人と物の初原の関係」（藤森前掲文）、あるいは今自身の言葉を借りれば、「人びとと自然との交渉」の「せつなさと面白さ」が、決して「恣意的に」（瀝青会前掲書）ではなく、立ち現れている。

同じような視点から、「林檎のなる土地」の家で私が興味惹かれるのは、母屋に埋め込まれた「厩」〔*うまや*〕である。これもまた瀝青会が読み解くように街道筋の住まい特有ではない。津軽の大小の寺社を巡れば、狛犬ならぬ狛の時を紡いでいる。

今和次郎が「せつなさと面白さ」を凝縮させて素描した家のごく近くでは戦後、「まなざしの地獄」（見田宗介）との葛藤で記憶される死刑囚が少年期を送り、「家郷」として憎悪のまなざしを向けつづけた。「林檎のなる土地」の郊外は決して静かな瀝青会前掲書ばかりでなく、物言わぬ裂け目がある。同書の言う「林檎の作付けで忙しい夏」も人びとと環境との交渉では生じえない。たいていの果物は「作付」されないし、林檎の夏は「葉かけ」と呼ばれる農薬散布で明け暮れることは、この土地に暮らせば誰でもすぐ気づくことだ。郊外の再発見は、そうした小さな感受性と想像力から始まるであろう。

〔参考文献〕

- *1 「日本の民家・田園生活者の住家」（1922年、鈴木書店）
- *2 「今和次郎と吉阪隆正」〔*Album*〕第6号（2008年3月号）
- *3 藤森照信『日本の民家』解説…今和次郎『日本の民家』（1989年／岩波文庫）
- *4 「日本食生活全集」第2巻…日本の食生活全集青森編集委員会編纂 農山漁村文化協会／1986
- *5 瀝青会『今和次郎「日本の民家」再訪』（2012年／平凡社）
- *6 見田宗介『現代社会の社会意識』（弘文堂／1979年）

平井太郎（ひらい・たろう）

2008年 東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学。博士（学術）。現在 弘前大学大学院地域社会研究科准教授（社会学）。

〔主な受賞〕マシヨン・コミュニティに関する研究で、2016年度日本都市学会論文賞

〔主な著書〕『だん着の地域づくりワークショップ』（筑波書房）、『ポスト地方創生』（弘前大学出版会）、論文に戦後日本都市における「コミュニティ」生成の論理と展望『日本都市学会年報』第53号（2020年）など。